

## 鬼師の世界

——白地：伊藤鬼瓦店——

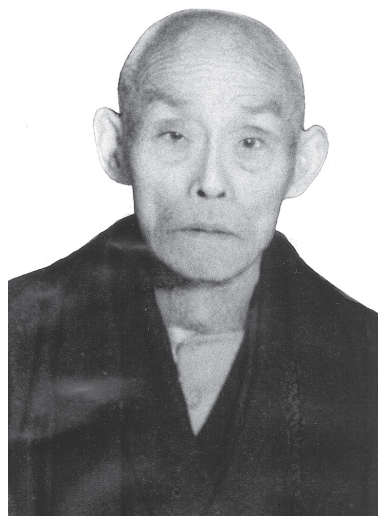
高 原 隆

白地の鬼瓦を手作りで、伝統的な手法を用いて製作する鬼板屋を調べてきて8軒目にたどり着いた。それが伊藤鬼瓦店である。他の7軒についてはすでに調査は終えている。鬼英（高原2010）、山下鬼瓦（高原2011）、カネコ鬼瓦（高原2012）、シノダ鬼瓦（高原2013）、石英（高原2015）、神生鬼瓦（高原2015）を見てもらえると三州鬼瓦の白地の世界が浮き上がって来るはずである。今回さらに伊藤鬼瓦店を加えることで、三州鬼瓦の生産拠点である高浜における「白地の世界」が完成する。すでに完成している「黒地の世界」が形成する鬼師の世界と合体させ、照らし合わせることによって、鬼師の世界の全体像が完全とは言えないまでも、かなり詳細に見えてくる。そういった意味で、伊藤鬼瓦店が何らかの縁をもって、「鬼師の世界」の取りをとることになる。今から15年前にすでに伊藤鬼瓦店には足を運び、いろいろ話をうかがってはいた。しかし、それからしばらくして、黒地の鬼板屋の調査に本格的に取り組み始め、流れに流れて今に至ったのである。振り返ってみれば、それほど鬼師の世界は深淵だったと言える。

### 伊藤末吉

現在、白地の鬼瓦を製作する伊藤鬼瓦店は高浜市二池町に工場と自宅が隣接する鬼板屋

で、すぐ近くには同業者の中では老舗に当たる鬼長の大きな工場が見える。伊藤鬼瓦店を興したのは初代の伊藤正男である。昭和12年（1937）2月14日生まれであり、今年78歳になり、すでに仕事の中心は二代目に当たる伊藤秀樹が受け継いでいる。しかし、仕事場と自宅が隣り合っていることもあり、1日に何時間かは仕事場に出て鬼瓦を今も製作している。自宅に上がって話を聞いている内にわかってきたことがある。伊藤鬼瓦店の初代は確かに伊藤正男なのだが、正男の先代、つまり父親に当たる伊藤末吉の存在を外すことは出来ないということである。伊藤末吉は明



第1図 伊藤末吉

治32年(1899)生まれであり、昭和40年(1965)6月15日に亡くなっている。その末吉は鬼師ではなかったが、瓦を手作りで作っていた。さらに瓦の中でも通常の瓦の形状とは異なる、いわゆる特殊瓦にあたる「道具もの」といわれる瓦も注文に応じて作っていた。末吉は瓦職人で、窯を持たない白地屋であった。また一方で魚を捕るのが好きで、いつしか漁業もするようになっていったのである。末吉が道具ものを作るのが上手い職人だったことが、後に息子である正男が鬼師になる切っ掛けを生むことになる。末吉が瓦を作っていた頃、鬼瓦屋である鬼金から特殊瓦である道具ものの注文が来るようになり、鬼金と取引をするようになったのである。これが伊藤鬼瓦店の誕生譚である。(第1図参照)

### 伊藤正男

そういった家庭に生まれ育った正男は小さい頃の事を次のように話している。

私が中学の頃には、もう、親父はどっちかという、あの、漁のほう、魚を捕るのが好きで、もう、彼(瓦を作ることを)止めちゃって、それでも記憶があるって……、小さい時はまだ(瓦を)やっとな。それから漁業に入ったわけです。うちの親父は……。

正男はそうした父親である末吉の影響を受けて、中学を卒業すると、夜間は定時制の高校に通いながら、末吉の仕事である漁業、特にちょうどその頃は海で寿司海苔を作る海苔屋をやっており、海苔の養殖をするようになったのである。しかし、この海苔屋の仕事をすることが鬼師になる切っ掛けを作ることになる。正男は鬼板屋である鬼金にどうして入ることになったのか語っている。

そのね、海苔っていうものは、だいたい半年ぐらいは、ゆう(遊、裕)があるもんですから、その時に鬼金さんに、私の親方ですね、鬼金さんに、「ちょっと手伝ってくれよ」ということで、(鬼金へ)行って、ほいで、それから私は鬼を教えてもらったもんですから。鬼金さんの、今のじゃない、先々代の、昭正君の前の直之さんの親父さん。

正男のいう鬼金さん、つまり先々代の、昭正君の前の直之さんの親父さんが、神谷金作(明治27年～昭和43年)である(高原2006)。初代鬼金こと神谷金作と伊藤末吉とのつながりが縁となって、直接金作から声が掛かったのである。漁師をしていた正男はこの金作からの話しを受けて、まずは海苔の漁の合間である5月から8月頃まで文字通り鬼金に手伝いに行くようになった。鬼金にこのようにして入ったのが17歳の頃であった。はじめの話しでは荒地から粘土を作ったり、窯出しや窯焼きの手伝いをするを頼まれていた。ところがある時、正男はいきなり「鬼瓦を作りたい」と親方である金作に言ったのである。

だけど、私は、フツと思って、それならば、「私は鬼の方がやりたいで」って言って……。そしたら、あの一、大将、社長が「あつ、そうか。ほんなら、やるか」と言って……。それから、あの一、窯へ入ったりすることを一切せず、即、小僧として鬼をやらしてもらったんだね。

だから、その頃は、まだ、あの一、機械化というものはないですから、全部手作り。図面描いて、……。それを、まあ、でも、2、3年やらしてもらったかなあ。手作りを主に。うん。

正男は最初は手伝いで、海苔をつくる仕事の「あい」に鬼金で働いていたが、昭和30年6月1日に正式に鬼金に入っている。正男が18歳の時であり、それから12年間、鬼金で仕事をし、昭和42年6月に鬼金をやめている。正男が鬼金に入った頃、鬼金には鬼瓦を作る職人が5、6人いたという。「一流の、もう当然、年配の方」だと正男は言っている。親方の金作は正男が入った年に61歳になっていた。そしてその頃、鬼金では二代目の神谷直之が昭和26年に始めた塩焼き瓦の生産も行っており、当時の鬼金は鬼と瓦を作る工場であった（高原2006）。正男が働き始めた頃の鬼金について語っている。

鬼金さんって方は、鬼屋だけでも、瓦屋だ。瓦もやっつる。両方とも。だから従業員が10何人おる……。

鬼を作るところと、瓦の工場と……。赤瓦って言って、釉薬の、今の……。前の……。塩焼き瓦のこと……。うん、だもんで、私が入った時にはもう塩焼きやっておられたもんで、ほいで、鬼が足らんで、鬼やらしてもらった。

鬼瓦を作る100坪弱ほどの建物が二棟あり、赤瓦である塩焼き瓦を作る工場がまた別に建っていた。その中の鬼瓦を作る工場の一棟へ正男は配属されたことになる。そして、その工場に働いていたのが神谷政夫であった。この神谷政夫が実質上の正男の師匠となる。正男は神谷政夫を弟子親方とも呼んでいる。つまり、鬼金こと神谷金作の弟子で、政夫の師であり、ある意味親方でもあったからである。

あの一、<sup>しゅ</sup>主に教えてくれとったのは、鬼金さんにおる神谷政夫さんっていうのが……。主に教えてくださった。それも職人

だったけど……。その人と一緒に、工場で、一つの棟で、工場で、教えてもらった。手に取ってもらって。

あ、はい。だから、あの一、こうやって言っていていかわからんけど、鬼金さんの大将もよ一教えてくれたけど、「こうした方がええぞ」ということを教えてくれたけど……。実質、私が見て覚えた仕事は神谷政夫さんちゅう方の、……職人さんだったね。

だから、その人は、あの一、何というか、我々は認定協会って昔はやってたんですね。その時の……。審査員ちゅうのかな。それをやってもらって。何だ、私が教えてもらって、私は一応、上級という、認定協会の……。第一回で受かったけどもね。その時は、10何人。やっぱり、その一、叩き上げの人間ばっかだわね。うん。

つまり正男は鬼金に入るや、すぐに神谷政夫のいる同じ工場に二人で一緒に並んで仕事をし始めたのである。正男に師匠である神谷政夫からどのようにして鬼瓦の作り方を習っていったのかをたずねた。

やっぱり、あの一、我々、手にとってやらして……。覚えるじゃなくて……。その人の仕事を見て、真似て……。真似ちゃあかんけども、自分で作るわね。手に手を取ってやってくれちゃ一何にもならんもんで……。弟子親方なもんですから……。大きいものも作ったり、何かしなざると、それを、あの一、なんだ、見て、置いてあるもんで、それを見て、自分で、それと同じようなものを作ってくわけね。手作りというものは。

ほだで、手で教えて……。手を、なんちゅ

うかな、「ここはあかんで、こうせよ」っていったことは言われるけど、絶対、手で、自分の手では教えてくれなかったもんね。あくまで、昔の、あの一、小僧なんて、みんなほうじゃない。親方は「これ見て覚えとけ」とか……、ほーだね。

逆に、今、潰<sup>つぶ</sup>され、つぶれとったということは……、ことによったら、わしの、私の、その人が、私の弟子親方が……。鬼金さんじゃなくて……。(笑い)

この最後の「潰され、つぶれとった」ものは、もちろん正男が工場で作った鬼瓦である。その話しは次のように始まる。

その頃は、今言う、えー、割合、職人氣質の大將ばっかだったもんで、気に入らんとね……。変な話し……。私は、まあ、「何とか出来た」と思って工場置いとくでしょう。ほで、朝行くと、つぶれとるわけよ。「これは気に入らん」って大將が……。今そんなことやったら、職人はおらへんけども……。昔はきつとおいでたと思う。そう言う話も聞いたでしょう。そしたら、「いやいや、あかんじゃんか」って言ってね、もういっぺん作り直しだわね。ほんだもんで、その頃の鬼師たちは腕のいい人が多い。今もあるけど、若いもんでも、あるけども、その比じゃねえな、うん。

通常、仕上げた鬼は粘土の生乾きの状態で、作業する台のすぐ後ろに列を作って三和土<sup>たたく</sup>の上に並ぶ。翌朝、潰された鬼を見るということは、職人が帰ったあと、親方が鬼の仕上がりを見て回り、出来の悪いのがあると、おそらく足で踏みつぶしたのである。正男は「どっちかわからない」と、親方なのか弟子親方なのか、どちらが潰したのかわからないと言っているが、製品として出すのは親方なの

で、親方の金作がした可能性が高いと言える。

どっちかわからない。つぶれや、気に入らんのがわかるとるもんで、大將が……。「あかんわ」って言って、ほで、もういっぺんやると。ほんで上手く出来りゃー「あつ、それならええぞ」と言わせる。ということは売り物ですからな、品物は、うん。だから、この売れんようなもの作ったって、結果、何にもならんもんですから、はい。だから、そう言う具合で、その人に(神谷政夫)……。うん、鬼金さんおる時はずっと……。ついとったかな、はい。

正男は他にも興味深い技術の修得に関する職人の世界について語ってくれた。正男は「悔しい思い」と言っている。若い頃の出来事だが骨身にしみて記憶に残っているのである。

そりゃーもう、悔しい思いもかなりしましたけどね。それから、同じ、同僚、年ぐらいの人がいると競うわけ……。そんなもんですから、あの、ちょっと出来るようになってきたら、私の同僚にしても私より三つ上だったかな。ええ、その人は腕も良かった。割合良かった。そうするとね、まあ、たとえば、大きなもの、鬼というのはいたい一棟に、大棟二個ほしいよね、左右に。均等に。だからね、二つやらしてくれるならいいわね。

一つずつやらされるわけ。(エーッ：驚きの声) はっはっはっ(笑い)。だから同じ工場……。 (笑い) その人と競うわけです。そこで、まあ、あの一、「俺、どうでもいいや」って奴はつぶれて行くし……。

私の場合は、なまじ運がいいというか、悪いというか。あの一、私が鬼金入ってって、その人は、やっとらした人が入ってきた。だから、その人がどうしても何年か古いもんですから、知っとるし。だから「一対一でやれ」という。こういう、こういうやらせ方したらね、意地でもやらなね、うーん……。「もう負けめん」とね。あるでしょ。そうすると同僚の人も、逆に若い人に負けたくないということで、また相手も逆に発憤するんで……。ま、あとで考えてみるとね。(笑い)

と言うことで、まあ、技術とか、そう言うことは、……ま、そんな感じで、今は何とか、上手いとは言わんが、まあ、なんとか、うーん……ということだね。

実際に正男から聴いた若い小僧から職人に成り上がる頃の苦い思い出は「鬼を潰された話」と「鬼の一対一対決」の2話である。こういう一種の身に堪える試練を一つ一つ乗り越えて、職人は技術を自分のものにしていっ

たことが見えてくる。

ここからは正男の師匠である神谷政夫について紹介していく。正男が鬼金へ正式に入ったのは昭和30年で、正男は18歳になっていた。神谷政夫と偶然に同じ棟の工場に配属され、政夫の下で鬼瓦の修業を始めたわけだが、その時、神谷政夫は26歳年上の44歳であった。つまり神谷政夫は明治44年(1911)に生まれている。正男は師匠の歳を次のように覚えていた。

ほいで、何でわかるかというのと、奥さんの干支が私と一緒に牛だもんですから。ほいで、「伊藤さん、二回り私より下だ」と言われたことがあったので、24……。その二つ上だもんで、26……。そう言うことかな。だもんで、一番バリバリやっておられた。いい時だわね。うん。(第2図参照)

政夫が最も脂がのり、元気だった頃に伊藤正男は神谷政夫と同じ仕事場で並んで鬼を作りを始めたのである。正男は師である政夫につ



第2図 経ノ巻菊水足付4尺 熱海城 鬼金にて 神谷政夫作  
左 神谷直之、左から3人目 古沢(職人)、右から2人目 神谷虎一、右 伊藤正男

いて話してくれた。

私にしちゃー、いい弟子親方だったね。あんまり怒りもせず。うん。ほいで、腕もいいと思ったし。はい。だで、あの、えー、人間が良かった方<sup>かた</sup>やね。私は本当なら教えてもらうには、ちょっと礼を出さないかんかったんだけども。

そう言ったら、「ほんなことはええで、重いものチョイと手伝ってくれ」ということでやらしてもらったわけやね。だから、あの一、なんといったかな、今でもやっとなる……。あの一、石膏型のがあったもんで、ほんだもんで、そういうものは、私が作ったものは、私の給料<sup>かた</sup>っていうのかな。親方に対して通れば私は私でもらったわけ。

神谷さんは、あの一、絶対、「私から教えるで金を……」とかそう言うことは一切言わず、ただ「見て覚えよ」というだけで教えてくれたで……。ほんで、今でも私は頭が上がるのだけど、うん。

まあ、当然亡くなったけどね、うん。だもんで、昔の……。親方<sup>かた</sup>っていうのは、そういうのが多かったんじゃない。だから、あの一、私は若いもんに言うんだけど……。教えてもらったら、昔で言うお礼を……。「給料<sup>かた</sup>もらってもええで、3年は教えてもらったところにおらなあかん」と……。今だと、覚えたら飛んでどこかに行っちゃうもんがあるもんねえ。(笑い)

そうした習わしのようなものが鬼師たちの間に仁義<sup>まこと</sup>のようにあったのかと正男に確認するように訊いてみた。

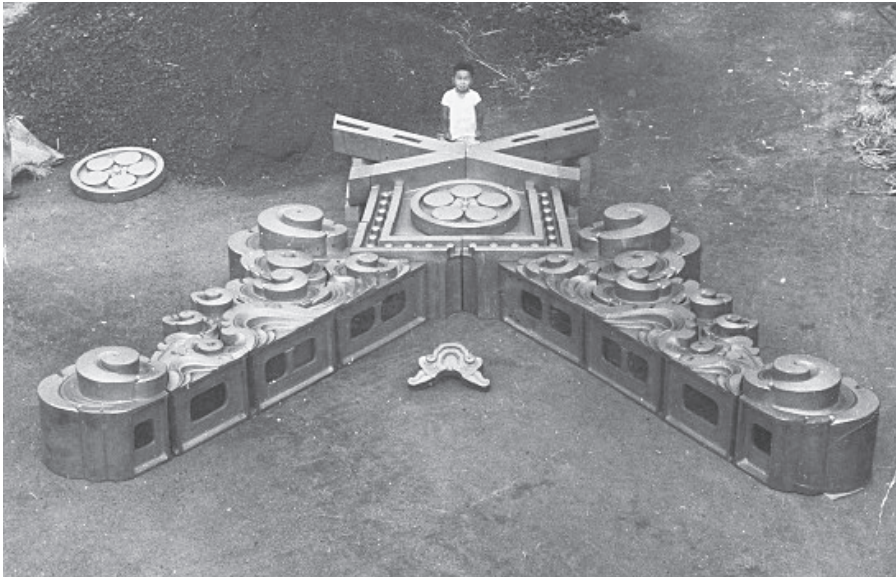
内々にね。「やれ」とは言わんけど、その、

自分は、我々の考えは、当然弟子方も一緒だけでも、覚えたら行っちゃったじゃなんの為にやったんだよと。だつて教えるのだからって赤字だからね。ある程度小遣いはくれるしね……。その私たちの持ち分でさえ……。品物がまともに出来んもんでね。今の会社だつて同じや。出来ん奴が初任給をもらうとしても、私から言わせりゃー、ちょっとおかしいな。うん……。そう言う、内々の、なんちゅうか、考えがあったな。

正男は当時の小僧から職人へと技術を身につけたあとの身の振り方に関する年季明けの慣習について語った。するとすぐに、神谷政夫のより具体的な「見て覚える」指導の仕方を話してくれた。

その、まあ、親方から神谷さんのところへ、「こういうもの作れ」とかいうことがあるでしょ。そうすると、「伊藤、よ一見とけよ」と。図面描くにも、「見とけ」てつて。ほんで、基本があるもんですからね。鬼というものは、いちおう、基本が四角いものであつて、外の何分の一が、まあ、たとえば、足なら足と、そう言うことがあるもんですから、「これを覚えとけ」と。ほいで事に依つたら、図面も描かしてくれたり……。その代わり、修正だね。完全なもの、まともに出来へんもんで……。神谷さんが直して、これで、こうやってつて、ということ……。そのくらいで……。「そのくらい」つて言っちゃいかんかな。あの一、あとは、やはり、見て覚える。今でも一緒じゃないかな。見て覚えんかぎりはな。うん、まあ。大事なものを触らせてくれへんもんでね。昔の職人さんは、当然プライド<sup>プライド</sup>が有ったもんね、うん。(第3図参照)

神谷政夫は最初の一つ目は正男の前で作つて



第3図 数珠掛け雲足付5尺 天理教梅鉢紋名古屋支部昭和29年 鬼金にて  
神谷政夫作

見せてくれたという。正男はそれに続けて、さらに説明していった。

あの、注文来たものをね。「それを見とれ」と。ほで、大きいものがあつたり、小さいものがいろいろあるけど……。ほれで、だいたい、あの一、施主、注文によって今でも一緒だけでも、「こういう格好のものが欲しい」とか言われると、基本に外れるものもあるんやね。だけど、やはり、施主の好きな格好のものを作らなあかんでしょ。だから、そういうことはあつたけれども、だいたい、基本ちゅうのかな、うん。こういうものは何寸の高さで、幅がどんだだけで、まあ、尺ならば4掛けなら4寸で……。そう言うことを教えてくれて。まあ、自分で覚えるわね。

なかなか、あの、それまでは言っておくれんけど……。 (笑い) ほいで、今言った、ちょっと自分の弟子の作ったものを、「おまえ、ちょっと直してみろ」と。「俺、こ

っち作ったで、こっちをちょっと真似事して見ろ」と言うことでやらしてもらうんだね。ほの時も、まただいたい直されとるけどね。まともに出来やへん。2年や3年じやあね。

こういったことを幾度も繰り返しながら、鬼の作り方を覚えていくのである。かなりの根気と辛抱強さをも同時に鍛えながら、鬼師への道を歩むことになる。すると次なる段階へと入る。

「あつ、これまで伊藤は出来たで、まあ、これよりもうちょっと大きいのやろうか」、みたいな。難しいものをやるとか。そう言うことで、それも、まあ、あくまで弟子親方よりは鬼金さん……。大将自体が売らんならんもんで、製品を見て、「あつ、自分はこれまで出来たなら、これも出来るだら」って言って、この時は、一人で一つのをやらしてもらえるわけ。うん。だから……。

正男はこうした一人前の職人になる苦労や努力について語りながらも、自分の身を振り返りながら、生まれ持った才能ないし素質についても言及している。やはり様々なところで天分の有る無しを実感するのだと思われる。

私自身も小僧というのか、そう言ういい方はまだなかったものですから、うん。あくまで見習いっていうことで……。私は恵まれとったな。かえって逆に、鬼金の金作さん自身だと、まっとうで厳しいよ。金作さん自身は現場入らへんものですから。うん、だから、私の場合は神谷さんについたちゅうのと、同じところでやらしてもらったものですから、かえって覚えるのも早かった。ほうじゃないかな。

だけど、今でも彫刻師と一緒に、やっぱりうちの息子を「気にいらん」で怒るんだけど……。まあ、何年かはやっとうちゅうと、やっぱり、ほの一、自分の……。持って生まれた……。何て言ったらええな、その、才というか……。筋とか……。それはあるね。何十年経ってもあかんもんな。どーもうまく、本人は納得しとつても、私みたいに……。私だって、そ一別にどつてことないんだけど……。腕も良くないけれど……。そう言うことはあるね。うん、だ、で、器用さと言ってはなんだけど……。

そうした職人の生まれつき持っている鬼師としての素質があることを体験として認めつつ、正男はさらなる技術の修得について話すのであった。

まあ、なかなか先輩に追いつくことは無理なものですから……。けども、それに近く、その人には、「そのようになれ」と、「物になる」と……。言われたいことで、

いくら潰されても、直されても、やはり我慢して、あの一、ほめられるって語弊があるけども、まあ、何とかなるかなあと……。「それなら、出せ」と……。言われる言葉が欲しかったものですから。まあ、それこそ、ムカムカしても我慢したわね。まあ、あの、なかなか先輩に追いつくことはねえ……。今言った、30年、40年の人に、3年や5年の者が追いつくことは絶対に無理だったし、やはり、事実……。そんな簡単なものじゃないと自分で思ったものだから……。

ほだで、「ちょっとでも上手にならんと」って言って、ほだで、親方がおらん時に、行って、見て、……。ちょっとでも自分の……。覚えるちゅうのかな……。作るような、そういった努力……。までいかんけども、やはり気持ちはあったな。うん。

正男が今話していることは明らかに他の鬼板屋でもよく耳にした「見て覚える」、またはさらに踏み込んで行われる、「技術を盗む」という行為に相当する領域の話になったので、もっと詳しく具体的に話してくれるように頼んだのである。

それがね、<sup>きわ</sup>際行って見とっちゃー、怒られちゃうもんね。「自分の仕事やれー」と、でしょう。だから……。今言った、一番ダメな……。親方が帰っちゃって、出て行って、帰っちゃったあとの、品物を見ると……。「ああ、ここはこういう具合で勢いがある」とか……。ほんだで、自分の手に来た時には、これを真似するんだね。あくまで真似だわ。そう言うことだね。覚えるのが……。一番……。ほだもんで、さっき言ったように、手を取って教えてくれるなんて言うことはまずないものですから。



こうした陰の努力をしながら職人は腕を磨いていき、その上にまた師匠からの指導を受けながら技が身についていく。

ただ、自分の作ったものを親方が、弟子親方（神谷政夫）が直しといてくれる。「こうでなきゃあかん」って。だけど、自分せっかくやったものを直されるも、あんまり正直言っても気持ちいいもんじゃないよなあ、わかっと思って。少しでもなおされんような品物が作りたかったってことはいえる。まあ、きっと、誰も、職人なんかみんな言っと思うわな。はい……。だもんで、まあ、「それー、ああ、ええな」ってっても、他の人にも「上手に出来たな」って言われると、「あ、良かったね」という考えだわね。

それより、まあ、ないじゃない。自己満足は十人十色。見る人があるで……。職人になった者は……。芸術家というのか、そういう人方も、うん。この歳でも、まだ自分が満足なのはなかなかで金ももんね。これはいいなんてものは50年もやっと思って……。50年ばかやない、60年になるか……。うん、まあ、いくつもないんじゃないかな。うん。みんな……。職人さん、みんなそう思っるとよ、まず。うん。我々の年代は……。

正男は鬼金で様々な苦勞、努力、工夫を重ねながら鬼瓦の技術を鍛えていき、鬼師になっていったのである。鬼金では弟子親方である師匠の神谷政夫と巡り会い、以来なんと政夫がこの世を去る（昭和53年頃）まで、交流が続いたのであった。その師である政夫が常日頃鬼瓦を作る際に言っていた事を正男から話してもらった。

「勢いのいいものを作れ」と、その一言

だね。うん。あとは、あの一、え一、あまりごちゃごちゃせずに、ほんだもんで、今言った、下で見て、いくらきれいに作っても、あの、大きさによって、何間<sup>なんけん</sup>くらいの高さに上がっていくかわかるでしょう。だから、このくらいの、何十度、「45度くらいのところから見た時に勢いのあるものを作れ」と。だから、「自分の作った鬼は見に行け」、……と。

ただ最後の「自分の作った鬼は見に行け」は職人にとっては難しい条件で、ほとんど見に行く機会はないという。理由は明快で、職人にどこの鬼を作っているのか、また出来上がってどこにその鬼が行き、どこの屋根に乗っているのか親方が教えてくれないからだという。正男は後に独立して、自ら親方になった時、初めて最後の教えを実行することになる。

鬼金での職人生活は昭和42年6月10日まで続いた。鬼金には昭和30年6月1日に入っているの、約12年間神谷政夫から鬼の指導を受けたことになる。正男は次に丸市へ移った。当時栄えていた他の鬼板屋である。この丸市には昭和48年7月1日まで職人として働いている。ほぼ6年間にわたっている。鬼金から丸市に移った理由は働いていた鬼金の工場の変容が大きい。もともと正男が鬼金へ入った頃、鬼金は鬼板屋と瓦屋が併設された工場であった。既に述べているように、鬼瓦職人と瓦職人が別々の棟の工場の仕事をしていた。ところが徐々に鬼瓦と瓦の生産の均衡が壊れていったのである。

鬼金さん（金作）は叩き上げの鬼板師だけでも、直之さん（二代目鬼金）って人は戦争終わって……。ほんで帰っておいでてやられたもんで。ほんだもんで、鬼というのはあまり実績がねえだ。うん。だもんです

から、かれこれ26年か経ったら……。ほだもんで、終戦20年だもんで……。なかなかね、うん。その、こういうことから、瓦が忙しかったもんですから、瓦の方へ替わられて……。だからほうすると、どうしても、両方とも上手くいくはずがないもんだから。片っ方、鬼の方……。職人さんもないなかったし。まあ、少なくなっていくわけよね。うん、手薄になっていった。ほんで、私も、あんまりそういう感じだったもんで、弟子親方の神谷さんが、丸市さんは鬼一本で動いたもんだ、ほれで、そちらへ誘われて。ほれから何年か経ってから、私の方へ、やれ、「手伝いに来い」と。そう言われて行ったんですよ。

鬼金での生産体制が世代交代に伴って、金作の「鬼瓦」から直之の「瓦」へと比重が移っていったのである。それに伴って、職人が他の鬼板屋へ移るという流れが出てきたのである。まず、なんと正男の師である神谷政夫が丸市という鬼板屋へ移り、暫くして、政夫は弟子の正男を丸市へ呼び寄せたのであった。しかも、丸市でも鬼金と同じように師の神谷政夫と同じ棟の仕事場で並んで鬼を作ることになったのである。おそらく政夫が丸市の親方である加藤晴一とこの件について掛け合ったことは間違いない。

「何十坪もあるのを一人で使いきれんで」って言うことで、「良かったら大将も来てくれ」って。ほれで、だもんだで、伊藤さんいっぺん来て……。いやなら別で……。棟でやってもらうわけで、弟子親方は神谷さんっていうのも聞いておるもんで。ほんだったら、ここで神谷さんが一人でやるとるで、半分空いとるで、ここで自由にやらんかと。「やってくれんか」と言われたもんで……。こっちは別にね、「あつ、いいですよ」って言って。だから、すんなり入

れたね、俺は。うん。

このようにして、いったん途切れた師弟関係が何年かした後、すぐに復活したのであった。ある意味まれな例だと思われる。

まあ、いちおう、神谷さんが先……。出ちゃったもんで、鬼金さんでは、まあ、私は一人前ということで仕事をやってたけども。だから丸市さん行っても、そういうことだけんど。私としては、わからんことが……。聞きやすかったし。「神谷さん、どうやったらええですか」、「もう、ちょっと、どうしたらええな」と言うのと、「こう、こう、こーやってやれや」と向こうも教えやすかったのかな。うん、弟子だもんで、うん。他の職人さん、言ったら、怒っちゃうな。「うるせい」って。私は恵まれとったかな。

当時（昭和40年代）丸市を仕切っていた親方は初代の加藤晴一であった（高原2007）。その晴一の元で職人として働いた一人が伊藤正男である。晴一のことを直接知っている丸市の職人として正男の話は、晴一という人物を浮き上がらせてくれるのであった。2007年以前に丸市についてまとめていた頃は加藤晴一について知っている職人を見つけることがなかったので、正男の話は貴重である。

丸市さんはねー、あの一、親父さんの方（加藤晴一）はねー、よ一、仕事場もたまに来て、「こうやるとええで」って、まあ、弟子親方おるもんで……。神谷さんおるもんで、おる前じゃ言わんかったけど。

大将、たまに入ってくると、「どうかなー」と。「まあ、これでいいけども、俺はここはこうしたいな」といった事は言わした。まあ一、流儀が違うもんで。

やっぱりねー、大将自体の腕が良かった。うん。あの一、元彦君（二代目丸市）の父親のね。どこの親方もだけど……、やっぱり頑固だったね。頑固って言っても、なかなか妥協しないというのかな。ただ私たちはいちおう職人として来とるもので、ボロクソまで言わへんよ。だけど今言ったように、やっぱり……、腕のええ人だもんで、我々はまだ若いもんで、若造じゃん。そうすると、「俺、ちょっとこの辺、こーするとなんかええと思うけど……、自分どうだよ」と。絶対、「こーせよ」とは言わへん。我々もいちおう職人としておるもんだで、それに、「あかん」って言ったら怒って止めちゃうのわかるとるもんで。そう言うことは二、三言われたな。

そこで褒められたのは、「伊藤、自分はシビがええ」と。「シビ」って彫ると言うこと。「自分、これ伸ばせ」って言われたのが、あの一、丸市さんの親父さんやったな。うん。

しかし、正男は6年後の昭和48年に丸市を辞めている。正男が36歳の時のことであった。正男はこの時、伊藤鬼瓦店として正式に独立して、親方になったのである。興味深いことに、この時もまた父親の伊藤末吉が息子である正男に大きく関与しているのであった。末吉が鬼瓦の為の仕事場を作る土地を持っていたこと。さらにそれ以上に重要なことは、末吉がもともと瓦の道具ものを作っていた関係上、鬼金の他にも取引先があったことがあげられる。鍋順瓦工業である。その社長が「鬼瓦を作れば製品を引き受ける」と正男に声をかけて来たのであった。当然のことながら正男は師の神谷政夫に相談し、<sup>だく</sup>諾を得て、伊藤鬼瓦店が誕生したのであった。既に末吉本人は昭和40年には他界しており、末吉は有形無形の遺産を正男に残していたこと

になる。

神谷さん、ここへよくおいでて、神谷さんに、「親父さんの関係の鍋順さんかな、全部やってけよと、俺一軒でやってけ」と言わせるけど、どうかなと言ったら、「うん、それはいいことだ」と。「職人……、ええけども、俺は一生職人だけど、自分でいいように……」。「自分とこの土地もあるし、やれるならやらんか」と言ってる。それで、「やれ」って言ってくれたもんで、やっただけだね。

そして、鍋順瓦工業と伊藤末吉との関係が、正男が職人から独立し、鬼板屋の親方になる直接の原因となったことは次の正男の話から明らかになったのである。

鍋順さんの先代というのかな……。親父さん。うちの親父との……。知り合いであったもんで……。瓦の時の……。その難しい物。手作りの物を、うちの親父がよっぽど頼まれてやっとなったけど。ほだもんで、うちの親父はどうも瓦師としては腕が良かったらしいね。うん、手先がようないと、そうでないとやれないね。鬼は作ってなかった。

で、私が……。鬼をやっとなるということを聞かれて……。ほれでわかるんで、「うちの仕事をやってくれんか」と。ほれで、今でこそ……。鬼でも、専門でやっとなるとしよう……。前は瓦屋さんが自分でやっとなった。全部。うん。だもんですから、私は、あの一、作ったものを即、鍋順さんの工場へ持って行って、それで鍋順さんが焼いて、販売しとらしたでね。今はもう……。システムというか、変わっちゃったもんで……。やっぱり専門になってきちゃったかな、うん。



第4図 左 神谷政夫 伊藤鬼瓦店にて鬼瓦製作中

このように正男は父、末吉に誘<sup>いざな</sup>われるかのように鬼金の門を潜<sup>くぐ</sup>り、鬼師となった。さらに末吉から肩を押されるようにして鬼板屋の親方となり、伊藤鬼瓦店が誕生したのである。また正男は師に恵まれていた。なんと正男が親方として独立した後も師である神谷政夫は正男の元へ駆けつけてくれたのである。

私はやって（独立して）、ほやけんど、忙しいもんで……。そしたら、ちょうどその頃に、神谷さんも、「まー、えらいで」って言って引退する。辞められたもんで、ほれでも、それ聞いたもんで、「神谷さん、俺やっとするけど、手がまわやへんで、ちょっと手伝ってくれんか」って。そう言って、あの一、鬼をちいと作ってもらった。だもんで、私はずっと……。神谷さんが亡くなるまで世話なっとったな。うん。（第4図参照）

### 伊藤秀樹

伊藤鬼瓦店二代目が長男の伊藤秀樹である。昭和43年1月10日生まれで現在伊藤鬼瓦の中心となって鬼瓦を作っている。秀樹は

記憶の中にある子供の頃の伊藤鬼瓦の話を中心に語っている。

物心着いた時からですよ。こんな感じですよ。ずっとやってますね。ま、半分、遊び場がこの工場の中というか。そうですね。ほとんど変わってないので。そんな感じですよ。親父もお袋も、あの一、二人で仕事やってましたので。もう、学校行って、帰ってくれば必ず工場は入るみたいな感じでしたね。

秀樹は岡崎にある愛産大三河高校へ進んでいる。その頃の伊藤鬼瓦に関連する話をしてくれた。

その頃までは……。自分は家<sup>うち</sup>を継ぐのかなとか……。若い頃ですからね、そういう意識はしていなかったです。

ま、今、今日も、お話聞かれたと思うんですけど、現状鬼瓦はね、ほとんど出ないような状況なので……。でも、中学ぐらいから、夏休みとか、長期の休みとかあると、家でアルバイトはしてましたかね。簡単な

ものですけど。プレスものだったり、もっと小さなものですか。仕事の手伝いや配達のお手伝いとか。ごそごそは。

ですからそんな流れで卒業して、高校は行ったぐらいから、「家でやるようになるのかな」と自分は多少なりとは……。やはり就職活動する同級生もおりますし、そういう流れで……。「これからは自分の家でやるのかなー」と思いましたけど。

まー、どっか考えていたとは思いますがね。もう高校3年の頃からですかね。まー、「家でやらしてもらえないか」ということを言いましたけど。

「やる気ならやれ」っていうことですかね。「それじゃ、お願いします」ということです。

秀樹はこのような流れで、自ら伊藤鬼瓦へ入っていったのである。やはり両親が目の前で働く姿を見て育ったことが大きく影響しているように思える。秀樹は他の鬼板屋へ修業に出されることはなく、鬼瓦の修業は父親であ

る正男のもとで始まった。つまり父親の正男が親方であり師匠であった。そしてすぐに仕事場で技術の伝承が開始されたのである。

わからないことを聞いたり、ある程度は見て。手取り足取りという職業ではないんです。ある程度は見て覚えるという。どうしようもなく困ると聞くという、そういう感じですね。ある意味、一種、職人の世界なので。

ある程度、親父が元気だった時は、親父が大きな物を手作りで作って、僕はその小さな物とか、補助に付いてとか、やはり製品が大きくなると一人では動かせなくなるような大きさになってくるので、補助で付いて、その時に見て覚えるというか、そういうことですね。

まあ、でも僕が入った頃くらいから、お袋、もともと身体からだがあまり強くないものですから。多少動けると来るみたいな感じになっていましたね。実質二人ですね。(第5図参照)



第5図 左 伊藤正男 右 伊藤秀樹 平成4年頃(1992) 伊藤鬼瓦工場内

(14)

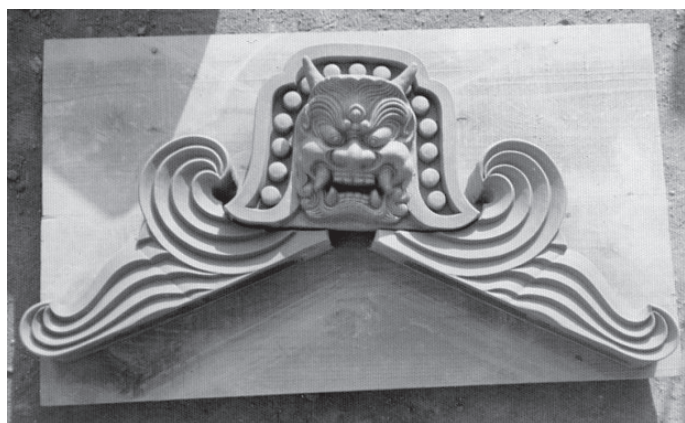
鬼師の世界



第6図 ビン付菊水吹流し 伊藤正男作 1993年



第7図 鯨 伊藤正男作 1996年



第8図 鬼面数珠掛け荒目足付 伊藤正男作

ここで正男が取った具体的な「見て覚える」の実践の仕方を是非教えて欲しいと聞いてみた。秀樹は次のように答えるのであった。

説明のしようがないんですよね、これが。それも製品によってそれぞれやり方が違うので。磨く方向から磨き方から。

そうですね。ほとんど磨き方とか、あーいうのも、他のものもそうですけど、ある意味、感覚の世界なんですよ。力入れすぎればつぶれちゃいますし、粘土も柔らかいのですから。その、どうやって覚えたかという、見て、自分でやって、製品になって初めて成功したのかなって、そういう、ある意味、曖昧な世界だと思うんですけど。完全に感覚の世界ですね。(第6、7、8図参照)

つまり、その都度、その都度、製品を作っていく過程で、身体で覚えていく。または「出来た」という感覚を積み重ねていく。しかも「出来た」という感覚が毎回、その都度、その都度、異なって現れる世界である。

そうですね。同じ製品、たとえばここに(インタビューをしている工場の中)この同じもの(経ノ巻という鬼瓦)が数ありますが、その、これを磨くのにしても最初のと最後の粘土の堅さも違うので、また力の掛け具合も違ってきますし。ですから、感覚ですね。仕上げの仕方というのは。(第9図参照)

次に高校を卒業して、親方のもとで働き始めて、いつ頃にある程度納得のいく物が出来はじめたのかとたずねてみた。回答は興味深いものだった。

それもね、難しいんですよね。未だにちょっときれいじゃないと思うような仕上げもありますし、たぶん、親父もあの歳になっても持ってると思いますけど。納得した一つのものを作るというのは、職人の世界だと、それに近づけようという努力はあると思うんですけど、きっとこれが100だというのはたぶんどの職業の職人さんに聞いてもないんじゃないですか。

僕の考えですけど、製品や相手、お客様の



第9図 伊藤鬼瓦工場内と経ノ巻の行列

屋根に乗って、お客様が決めることじゃないですか。そう思いますよ。初めて屋根に上がって製品なので。最終形態になるので。ですから鬼瓦によっては下で屋根に上げる前に下で見られる方も多いですよね。「こういうのが出来ました」って。すごく特殊なものになると。それを屋根に載せて下から見た時に、また印象が変わってくるんですよね。ものすごく細かい細工をして、下で1m、2mで見るときれいですが、上に上げると細かいのが見えないので、逆に荒い方が良かったとか。

ほんとに上がった時点のお客様が「これはいい」って思っただけであれば100点とまではいかずも……。多分、物作りの職人さんは同じ事を言われると思うんですけど、みんな。そんな感覚ですよ。ただ、作る方はもう満足はなかなかしないんじゃないですか。(第10図参照)

技術を高める工夫は当然のことながら日々要求される世界である。秀樹にこの事について聞くとさらにおもしろい話が返ってきた。鬼師の技術修得の基本は「見て覚える」である。これは別の言い方をすると「見て盗む」

ことを意味する。それ故に鬼師の間では独特な慣習ないし動きが発生する。

やっぱり、同業者のとこに行った時に変わったような製品を作っていると、「ここ、こんな風にしてるんだー」とか、変な話しかも知らんけど、仲のいいとこに行っても、「ちょっと覗かして」って、のぞかしてもらったり。なかなか覗かしてもらえないとこが多いんですけど……。

また「聞くこと」も重要な技術向上の手段になっている。実際、鬼師は正男もしばしば言っていたように、「手にとって教える」ことは無いのだが、「こうせよ、ああせよ」と適切な言葉による指示は行われる。秀樹も次のように話している。

お互い情報交換できる仲のいい同業者とかならね。それこそ「こういう風になったんやけど、どうしたらいい」とか。先輩方、ほとんど先輩方なので僕より。仲のいいことかは「こうしたらいいんじゃない」とか教えてくれたり、「あー、じゃあ、そうしてみるかー」とか。それを聞いて、やって、初めて少しずつこう変わっていくのか



第10図 鬼瓦製作中の伊藤秀樹 2015年



なと思いますけど……。

秀樹の師匠は父親である正男であるが、他にも師というか、強いつながりのある人がいるのかたずねてみた。

うちはね、親父の代からお世話になっている今の春日（高浜市春日町）にあるシノダ鬼瓦さん。わからないことがあった時には……。親父は若い頃から仲良かったですよ。その関係もあって、いろいろ僕より先輩なので、僕の方から相談して聞いてもらって……。

親父さん（篠田勝久）はね、……宮本君（二代目シノダ鬼瓦<sup>やすし</sup>宮本恭志）は僕より五つくらい上だったかな。逆にそういうところでないと。やっぱり他の取引のないような手作り屋さんは、同業者を嫌うんですよ。やっぱり、あの……。盗まれる」というか。先程話したように、職人さんみんなそうだと思うんですけど。要は、いい方が悪くなっちゃうかも知れないんですけど、全てが商売敵なんですよ。昔は景気がいい頃は「仕事取って」、「取られた」というのが多かったみたいですけど。ですから、よほど気の許せる相手のところで聞くしか、逆に教えていただけない。もう、篠田さんは僕が若い頃からお世話になっているので……。

最後に秀樹は工夫の一つとして鬼を作る原材料である粘土の質の変化への対策を上げた。時代の変化（環境破壊、環境汚染、都市化、産業化）を直に受ける業種が瓦業界である。その影響が直に反映する原材料の粘土の問題は現場と直結しているのである。

粘土がどんどん悪くなってきているので、それに合わせた仕上げをしないといけない

んですよ。昔の純粹粘土のように品質がいいような状態だとなかなか傷の出なかった製品も、どうしてもどんどん粘土自体の品質が落ちているので、傷も出やすくなるんですよ。だからそれを気をつけるっていうような感じですよ。

粘土屋さんからそういう情報も入って来ますし、まず僕ら「粘土の起こし」って言うんですけど、起こしてる時、仕上げをしてる時が一番わかりますね。

僕が入ってから（昭和61年）でもずいぶん粘土の質が落ちてるので、きっと親父たちがやとった時の粘土と比べると、ずいぶん品質は落ちてると思いますね。常滑で多少いいのがとれるような話も聞きますけど、そうすると単価が高くなっちゃうんですよ。粘土がたとえば倍の値段でいい粘土が出て、製品に倍の値段に変えられるかと言ったら、そういう業界ではないので、嫌らしい話、金額的なものがどうしても掛かってくるので……。

ですから、その粘土に合わせた作り方というか、厚くしたり、薄くしたり、そういうところに気を<sup>つか</sup>遣いますよね。傷が出たり、篋の減りも早いですし、まあ、そういうとこ気をつけるくらいですよ。あとは一つ一つ丁寧に起こして、丁寧に仕上げるとこぐらいですかね。

### とよかず 伊藤豊寿

秀樹には弟がおり、同じ工場です仕事をしている。秀樹にインタビューをしている時も、いきなり戸ががらりと開いて入ってきて仕事を始めたのが豊寿であった。兄の秀樹とは4歳離れており、昭和46年に生まれている。高校を卒業して、鉄工場や釣具屋で働いた



第11図 型起こし作業中の伊藤豊寿 2015年

後、21歳になって伊藤鬼瓦店に舞いもどる形で入っている。やはり兄と同じように小さい頃から家業である鬼板屋を手伝ってきている。

中学、高校、まあ、夏休みとか、プレスをやってましたね。なんだかんだやっていた。小学校の時から配達について行ったりしてましたね。

豊寿は21歳から働き始めると、仕事場ではプレス機械による鬼瓦の生産を任せられ、その中心となって今日に至っている。プレスの使い方は兄の秀樹から習ったという。ところが仕事量が、伊藤鬼瓦に入った当時から比べると半分以上に落ち込んでいる大きな変化に対応して、現在は鬼瓦の型を起こす仕事を中心になってきているのであった。また仕事量の減少に伴って、鬼の種類が限定されてきているのが現状だという。型を起こす上でいつも気をつけていることを話してくれた。

型がよう割れるんですよ。湿っちゃうと、ちょっと力を入れるだけでピシッと入っちゃうもんで、傷が。型が割れちゃうん

ですよ。それを気をつけてはやってますね。

単純に乾いとればある程度力を入れても大丈夫なんです。湿ってくると、ちょっとした力でも、割れちゃったりしますけどね。最後の1歩で、「これで終わりだー」って時に限って割れるんですよ。(第11図参照)

ここでも兄の秀樹が言う「感覚の世界」が顔を覗かしていることがわかる。力加減という独特な感覚が物を言うのである。

### まとめ

手作りの白地屋として八軒目に当たる伊藤鬼瓦店の三代にわたる流れを追ってきた。完成してみて改めて振り返ってみたい。確かに伊藤鬼瓦店は伊藤正男によって鬼板屋として起業され、正男は丸市の職人から独立し、親方になっている。しかし、伊藤鬼瓦店の始まりを作ったのは正男の父、伊藤末吉であることは明白である。しかも、ただ単に正男を漁師から鬼師へと誘<sup>いざな</sup>っただけではなかった。

正男が小僧から初めて独立した鬼師になっていった鬼金での12年間、さらに丸市に移って鬼瓦職人として働いた6年間を通じて実力をつけていた頃、親方になって鬼板屋を起こす原動力になったのも末吉であった。末吉が創り上げていた人脈が息子の正男にとってのかけがえのない財産となっていたのである。

もう一つの特徴が伊藤鬼瓦店の背後にあるもう一人の人物である。神谷政夫の存在である。鬼金で正男を小僧から鬼師へと育て上げたのは神谷政夫である。12年間鬼金の同じ工場ですべて仕事をしている。正男は鬼金を先に去り、別の鬼板屋である丸市に移る。しかし暫くして政夫は弟子の正男を丸市へ呼び寄せ、丸市ですらに6年間一緒に仕事をしたのである。ここまででも異常なのであるが、師の神谷政夫は弟子の伊藤正男の独立を支持し、親方になった正男の元に駆けつけ、さらに数年手伝った後、暫くしてこの世を去っている。

もちろん正男は伊藤末吉や神谷政夫以外に

もたくさんの人たちに助けられ、支えられて、今の伊藤鬼瓦店を盛り立ててきた。しかし、この二人の存在なしには鬼師としての伊藤正男は存在せず、伊藤鬼瓦店もなかったことは事実である。伊藤鬼瓦店の物語は鬼師の伝統を支える人と人との強い絆の存在を事実として示していると言えよう。

#### 参考文献

- 高原隆 2006年 「鬼師の世界—黒地：山本鬼瓦系(2)—」『文明21』第16号：93-116
- 高原隆 2007年 「鬼師の世界—黒地：丸市、(杉荘)、萩原製陶所(1)—」『文明21』第19号：55-72
- 高原隆 2010年 「鬼師の世界—白地：鬼英」『文明21』第25号：53-75
- 高原隆 2011年 「鬼師の世界—黒地：山下鬼瓦と白地：山下鬼瓦白地—」『愛知大学総合郷土研究所紀要』第56号：51-77
- 高原隆 2012年 「鬼師の世界—白地：カネコ鬼瓦—」『愛知大学総合郷土研究所紀要』第57号：1-21
- 高原隆 2013年 「鬼師の世界—白地：シノダ鬼瓦—」『愛知大学総合郷土研究所紀要』第58号：1-21
- 高原隆 2015年 「鬼師の世界—白地：(榎)石英—」『文明21』第34号：151-175